

大活躍した明石元二郎に匹敵する貢献をした男は戦後、不遇だった

司馬遼太郎が描かなかった日露戦争 もう一人のインテリジェンス・オフィサー

『坂の上の雲』が描かれた当時、秋山兄弟をほとんどの日本人が知らなかった。司馬遼太郎はこのように無名の人物に焦点をあてることによって日露戦争を描いたが、ほかに

のひとは明石にある」と作中で記しているが、外交ジャーナリストの手嶋龍一氏は、司馬があえて登場させなかったもうひとりの「対露工作の主役」がいるという。

＊

『坂の上の雲』が描かれた当時、秋山兄弟をほとんどの日本人が知らなかった。司馬遼太郎はこのように無名の人物に焦点をあてることによって日露戦争を描いたが、ほかに

司馬遼太郎が『坂の上の雲』を新聞に連載した昭和43年から47年は奇妙に安定した時代

だった。オイルショックをまだ知らない日本は高度成長の果実を堪能し、経済大国としての道をひた走っていた。だがその一方で、帝国の指導者が正しいと呼号して突き進んだ戦争が惨めな失敗に終わったために、人々は国家そのもののへ十全な信頼を寄せていなかった。そのうえ冷たい戦争を戦うアメリカは、

自由主義陣営に極東の経済大国をがっちり組み込んで、日本に独自の歩みを許さなかった。こうした状況下では、戦後日本の若者たちは、国家に自らの命運を託すことができなかった。

そうした時代のさなかに颯爽と現われた『坂の上の雲』は、明治という国家に自

らの青春群像をびたりと重ね合わせて何事かを成すことができた時代を描いて、人々に新鮮な感動を与えたのだった。

この作品にはロシアの帝政に不満を抱く革命分子に資金を援助し、革命を助けて、背後から攪乱工作を行なった陸軍大佐・明石元二郎の姿が描かれている。だが、彼と同時代を生き、同じくロシアで情報収集活動の任に当たった人物は、ついに描かれることがなかったのである。この忘れられたインテリジェンス・オフィサーの名は、石光真清。

彼もまた、若き明治国家の命運と自らの青春を重ね合わせ、身を国家に捧げた青年だった。石光真清は、明治維新の年に熊本の子として生まれ、陸軍幼年学校に入学し、陸軍士官となる。そのまま陸軍の要路を歩めば、将官の地位が約束されていたことだら

う。しかし、日清戦争に出征した若き士官、石光真清は、北の強国ロシアの影が極東に伸びていることを敏感に感じ取る。彼は1899年に軍籍を離れた形をとり、ロシア極東の戦略都市ブラゴベシチェンスクに留学する。ここに、インテリジェンス・オフィサー、石光真清が誕生した。

ブラゴベシチェンスクは、極東を睨むロシア最大の軍事拠点でもあった。石光は菊池正三と名を変え、現地でロシア語を学び、人々と交わりながら、ロシアの情報収集に当たった。

そこでの体験が石光の人生に大きな転機をもたらすことになる。義和団が北京を占拠し、西欧列強の公使館を包囲した北清事変に遭遇し、満州



外伝ジャーナリスト・作家
手嶋龍一

TESHIMA
Ryuichi

ハルビン潜入前にウラジオ
オストックで過ごした仲
間と写る石光真清(左端)。

では清国軍がブラゴベシチェンスクを砲撃した。ロシア軍は直ちに反撃に出て、ブラゴベシチェンスクに在住していた清国の民間人約3000名を虐殺し、その遺体をアムール河に流したのである。この惨劇を目の当たりにした石光は、手記で「この日から大東亜戦争の大仕掛けな血闘史が幕を切つて落とされたと言つてよい」と記している。

ロシア軍の懐へ入り込み 金と情報を吸い取る

二度目は、軍籍を抜いて、写真館の経営者という一民間人に身をやつしてハルビンに入る。ロシア軍将校からの信頼を得て、軍当局と東清鉄道の御用写真館としての地位を築き、ロシア軍相手の商売で多額の利益を上げた。石光はその資金を元手に、満州全土に写真館の支店を建設し、対露諜報網を構築していったのである。痛快と言うほかない物語だ。

ロシア軍の満州侵攻と馬賊狩りの騒乱のなか、馬賊の頭目と結び、一度目は洗濯屋としてハルビンに潜り込む。石光の残した手記によれば、生命の危機に瀕したのは一再で

たのである。

満州から日本に引き揚げると、石光は諜報活動の実績を買われ、軍に第二軍司令部付副官として召集される。再び軍服を身につけて満州の地を再度踏む。石光

の脳裏に浮かぶのは、ブラゴベシチェンスクで無惨にも虐殺された清国人の姿だった。祖国の人々を同じ目に遭わせではならない。

兵力も兵器も格段に優り、世界最強と謳われたロシア陸軍を相手にしては、日本軍は肉弾戦を挑むよりほかなかった。2年にも及ぶ激しい戦闘で、石光は親友を失い、兄と慕った恩人を失い、膨大な数の若い勇士の命を失った。いつ果てるともわからない死屍累々たる戦闘は、連合艦隊がロシアのバルチック艦隊を打ち破ったことでようやく終止符が打たれた。

当時の陸軍統帥部には、兄玉源太郎をはじめ、豊かなインテリジェンス感覚を備えた首脳がそろっていた。石光のもたらした貴重なロシア事情報が、日露戦争で日本を勝利に導く一助となり、祖国の危

機を救ったといえよう。彼の生涯でも、この満州時代が最も輝いていたといえよう。明治の時代の坂の上に自らも身を置いていたのだった。

だが日露戦争の勝利は、やがて日本のその後も、また石光のその後も、大きく変質させていく。彼は軍の要請で三度満州の地に戻っていくが、そこにはもはや彼の居場所がなかったのである。石光は失意のなかで帰国。三等郵便局長となり、市井の人として静かな暮らしを始めている。

しかし、ロシアにボルシェビキ革命が起き、列強は赤色革命の波及を恐れてシベリアに出兵。こうした情勢のなかで、またもや参謀本部は石光に白羽の矢を立て、シベリアに送っている。だが、時代は明治から大正に移り、軍も巨大な官僚組織に変質し始めていた。列強の動きに促されてシベリアへ出兵していく。石

光はもはや国家の命運と自らの理想を重ね合わせる事がかなわなくなっていた。現地のロシア人や中国人と信頼の絆を深めるほど、軍中央の意向とは背馳していく。石光は多くの義勇兵たちを失い、失意のなかで諜報活動から身を

引くこととなる。

彼は、自らの手記として、『城下の人』『曠野の花』『望郷の歌』『誰のために』(中公文庫)の4部作を残している。

インテリジェンス・オフィサーは情報源の秘匿のため、秘密は墓場までもっていくのが彼らの宿命だ。そこには、膨大な犠牲の果てに守ったはずの祖国が醜く変わり果ててしまったことへの深い絶望が読み取れる。

『坂の上の雲』には石光真清について記述がない。司馬遼太郎が石光の存在を知らなかったのではない。にもかかわらず彼を描かなかったのは、石光の人生の核心がその後半生にあったからでないだろうか。

秋山兄弟を主人公とする物語は、明治維新から日露戦争で強国ロシアを打ち破るまでの坂の上に位置している。輝く明治の時代を活写したものだ。だが、石光の日露戦後も、日本海海戦を勝利に導いた名参謀秋山真之の日露戦後が海軍関係者が口を緘するほどに悲惨だったように、荒涼としたものだった。それゆえ司馬は筆を執る意欲を萎えさせてしまったのだろう。